

## 教師の誰もが取り組める実践的、具体的な指導方法の模索

図画工作科では他教科と同じように、どの学校のどの学級であっても、子供たちの資質・能力が、教師の指導によって伸長されなければならない。このことは認識されているだろうか。そして、「技能教科」などという捉え方によって、図画工作科の指導に「苦手意識」や「誤解」をもってしまう教師が少なくない。

さらに、教育現場における図画工作科指導には、少なくとも次の2点の問題が存在すると筆者は考えている。

### 1 授業間隔の問題

図画工作科の授業は、週に1回が限度である。そのため、子供がせっかく授業で経験したり、身に付けたりしたことを、1週間後の授業で忘れていたり、意識できなかつたりすることが見られる。特に高学年では、年間授業時数が50時間であることや、学校行事などによって、2週間以上も図画工作科の授業間隔が開くことがある。

この授業間隔の問題は、表現や鑑賞の能力を定着させるための教師の継続的指導や、子供の学習意欲などに影響を与えると考えられる。そのため、例えば授業の導入では前題材や前時に何を身に付け、どんな成果があったかかなどを全体で確認することが重要になる。

### 2 学習状況把握の問題

教師が他教科と同じように、一人一人の子供が何を学んで、何を身に付けたのかということをも具体的に把握しているのかという問題がある。

例えば、前学年まで、あるいは前時間までの図画工作科の授業で、子供がつかんだ発想や構想の手立てや、表し方などを具体的に把握した上で、授業が計画され、進められているだろうか。文字や数字を扱う教科であれば、学習状況を記録したり、分析したりすることをほとんどの教師が得意としている。しかし、点・線・形・色・質感などの造形要素を扱う図画工作科で学習状況を記録したり、分析したりすることに、ほとんどの教師が難儀していると考えられる。そのため、例えば子ども自身が「ふり返しシート」に発達段階に応じて、「造形的な見方・考え方」を意識して学習状況を記録し、それを教師が授業ごとに分析して活用することが、実質的には有効と考えられる。

以上のように考えている筆者は、本校『平成30年度研究紀要』で「美術教育を専門としない教師でも取り組むことができる実践的、具体的な指導方法などが開発されてきたと言いはない」と述べた。このことに本校図工部の提案授業、そして実践研究などは十分に伝えてくれたと筆者は考えている。

本校図工部は、子どもが「省察」によって学習したことや経験したことを自覚、意識化して、表現を「工夫」するようになって、表したいイメージに近づくことを願っている。そのため、「工夫」が生まれる基盤となる「試行錯誤」の過程を積極的に保証している。

「工夫」が生み出される「試行錯誤」が、実際的に、そして効果的に行われるためには、子どもが発想や構想を発展させたり、表し方などを各題材で身に付けたりすることを教師が系統的、継続的に指導しなくてはならない。「知識」と「技能」をつなげることや、「発想」や「構想」を同じ型の繰り返しから脱却させることにも、教師は留意しなくてはならない。

これらのことを本校図工部は、提案授業や日々の授業、実践研究で柱として位置付け、具体化していると筆者は考えている。是非、このことを読み取っていただき、参考にさせていただきたい。

6年C組での提案授業で特に印象的だったのは、導入で進藤先生が子どもの「省察」を確実にするため、「表したいイメージを効果的に伝えるためには、どのようなことに着目してつくればよいのか」と、選定した子どもの表現について、全員に問いかけたことである。この導入のために進藤先生は、事前に子どもの振返りを十分に分析して、集団思考が高まりやすい表現を選定した。

問いかけに対して子どもたちは、「赤やオレンジや黄色などの暖色は温かい気持ちを表してくれる」、「形は見えない気持ちを表すことができる」、「足跡の形を使うと前向きな気持ちを表すことができそうだ」、「2つの足跡を並べるとゴールにたどり着いたように見える」、「足跡の方向で前進のイメージが生まれる」、「一点に集まるように並べ方を工夫してはどうか」、「星の輝きの表現では、(モダンテクニックの)スパッタリングが使えるのではないかなどと、作者の表したいことに近づくための「工夫」について、盛んに発表していた。

この導入をきっかけにして、子どもたちは自分自身の表現に対する「省察」を深めている。その後の展開では「試行錯誤」の姿、例えば身に付けてきたモダンテクニックなどの表し方を改めて思い出したり、遠近感や視点の変化を試したりする姿を見せた。これは進藤先生の系統的、継続的な指導の積み重ねの成果でもあった。

